

石川啄木全集

第一卷 歌集

筑摩書房

石川啄木全集 第一卷 歌集

昭和五十三年五月二十五日初版第一刷発行

昭和五十五年八月二十五日初版第四刷発行

著者 石川 啄木

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話東京二九一―七六五一(営業)

二九四―六七一一(編集)

振替東京六一四―二三郵便番号一〇一―九一

¥2,000

印刷 晁印刷 製本 矢嶋製本

Printed in Japan

(分類)0392 (製品) 76601 (出版社) 4604

目次

歌集 一握の砂	一	小天地	一六
歌集 悲しき玩具	七	紅苜蓿	一三
新聞に発表された歌		心の花	一三
岩手日報	一七	春潮	一六
岩手毎日新聞	二二	新天地	一六
小樽日報	二二	敷島	一六
釧路新聞	二六	スバル	一七
国民新聞	二六	創作	一八
東京朝日新聞	三〇	学生	一九
東京毎日新聞	三〇	曠野	一四
函館日日新聞	三三	文章世界	一九
雑誌に発表された歌		精神修養	二〇
爾伎多麻	一四	早稲田文学	二〇
盛岡中学校校友会雑誌	一四	秀才文壇	二〇
明星	一四	コスモス	二三
		新日本	二三

歌集

一握の砂

世の中には途法も無い仁もあるものぢや、歌集の序を書けとある、人もあらうに此の俺に新派の歌集の序を書けとぢや。ああでも無い、かうでも無い、とひねつた末が此んなことに立至るのぢやらう。此の途法も無い処が即ち新の新たる極意かも知れん。

定めしひねくれた歌を詠んであるぢやらうと思ひながら手当り次第に繰り展げた処が、

高きより飛び下りるとき心もて

この一生を

終るすべなきか

此ア面白い、ふん此の刹那の心を常住に持することが出来たら、至極ぢや。面白い処に気が着いたものぢや、面白く言ひまはしたもののぢや。

非凡なる人のごとくにふるまへる

後のさびしさは

何にかたぐへむ

いや斯ういふ事は俺等の半生にしこたま有つた。此のさびしさを一生覚えずに過す人が、所謂当節の成功家ぢや。

何処やらに沢山の人が争ひて
鬭たたか引くごとし

われも引きたし

何にしろ大泥雑のおしあひへしあひで、鬭引の場に入るだけでも一難儀ぢやのに、やつとの思ひに引いたところで大概是空鬭ぢや。

何がなしにさびしくなれば

出てあるく男となりて

三月にもなれり

とある日に

酒をのみたくてならぬごとく

今日われ切に金を欲りせり

怒る時

かならずひとつ鉢を割り

九百九十九割りて死なまし

腕拱みて

このごろ思ふ

大いなる敵目の前に躍り出でよと

目の前の菓子皿などを
かりかりと噛みてみたくなりぬ
もどかしきかな

鏡とり

能ふかぎりのさまざまの顔をしてみぬ
泣き飽きし時

こころよく

我にはたらく仕事あれ
それを仕遂げて死なむと思ふ

よごれたる足袋穿く時の
気味わるき思ひに似たる
思出もあり

さうぢや、そんなことがある、斯ういふ様な想ひは、俺
にもある。二三十年もかけはなれた此の著者と此の読者
との間にすら共通の感ぢやから、定めし総ての人にもあ

るのぢやらう。然る処俺等聞及んだ昔から今までの歌
に、斯んな事をすなほに、ずばりと、大胆に率直に詠ん
だ歌といふものは一向に之れ無い。一寸開けて見てこれ
ぢや、もつと面白い歌が此の集中に満ちて居るに違ひな
い。そもそも、歌は人の心を種として言葉の手品を使ふ
ものとのみ合点して居た拙者は、斯ういふ種も仕掛も無
い誰にも承知の出来る歌も亦当節新発明に為つて居たか
と、くれぐれも感心仕る。新派といふものを途法もない
ものと感ぢがひ致居りたる段、全く拙者のひねくれより
起りたることと懺悔に及び候也。

犬の年の大水後

藪野 棕 十

函館なる郁雨宮崎大四郎君

同国の友文学士花明金田一京助君

この集を両君に捧ぐ。予はすでに予のすべてを両君の前に示しつくしたるものの如し。従つて両君はここに歌はれたる歌の一一につきて最も多く知るの人なるを信ずればなり。また一本をとりて亡兄真一に手向く。この集の稿本を書肆の手に渡したるは汝の生れたる朝なりき。この集の稿料は汝の薬餌となりたり。而してこの集の見本刷を予の閲したるは汝の火葬の夜なりき。

著者

明治四十一年夏以後の作一千余首中より五百五十一首を抜きてこの集に収む。集中五章、感興の来由するところ相^も遇^あきをたづねて仮にわかつてるのみ。「秋風のこころよさに」は明治四十一年秋の紀念なり。

我を愛する歌

東海のとうかい小島のこじま磯のいそ白砂しろすなに

われ泣なきぬれて

蟹かにとたはむる

頬ほにつたふ

なみだのごはず

一握いちめくの砂すなを示しめしし人ひとを忘わすれず

大海たいかいにむかひて一人ひとり

七八日ななやうか

泣なきなむとすと家いえを出いでにき

いたく錆さびびしピストル出いでぬ

砂山すなやまの

砂すなを指ゆびもて掘ほりてありしに

ひと夜よさに嵐あらし来きたりて築きづきたる

この砂山すなやまは

何なにの墓はかでも

砂山すなやまの砂すなに腹はら這はひ

初恋はつこひの

いたみを遠とほくおもひ出いづる日ひ

砂山すなやまの裾すそによこたはる流木りゅうぎに

あたり見みまはし

物言ものいひてみる

いのちなき砂すなのかなしさよ

さらさらと

握にぎれば指ゆびのあひだより落おつ

しつとりと

なみだを吸すへる砂すなの玉

なみだは重おもきものにしあるかな

大だいといふ字じを百ひゃくあまり

砂すなに書かき

死ぬしことをやめて帰かへり来きたれり

目めさまして酒さけ起おき出いでぬ児この癖くせは

かなしき癖くせぞ

母ははよ咎とがむな

ひと塊くわいの土つちに延のし

泣なく母ははの肖えがな顔がほつくりぬ

かなしくもあるか

燈あかり影かげなき室しつに我われあり

父ちちと母はは

壁かべのなかより杖つゑつきて出いつ

たはむれに母ははを背せ負おひて

そのあまり軽かろきに泣なきて

三さん歩ぽあゆまず

飄ふう然ぜんと家いえを出いては

飄ふう然ぜんと帰かへりし癖くせよ

友ともはわらへど

ふるさとの父の咳する度に斯く

咳の出づるや

病めばはかなし

わが泣くを少女等きかば

病犬の

月に吠ゆるに似たりといふらむ

何処やらむかすかに虫のなくごとき

ころ細さを

今日もおぼゆる

いと暗き

穴に心を吸はれゆくごとく思ひて

つかれて眠る

ころよく

我にはたらく仕事あれ

それを仕遂げて死なむと思ふ

こみ合へる電車の隅に

ちちこまる

ゆふべゆふべの我のいとしさ

浅草の夜のにぎはひに

まぎれ入り

まぎれ出で来しさびしき心

愛犬の耳斬りてみぬ

あはれこれも

物に倦みたる心にかあらむ

鏡かがみとり

能あたふかぎりのさまさまの顔かほをしてみぬ
泣なき飽あきし時とき

なみだなみだ

不思議ふしぎなるかな

それをもて洗あらへば心こころ戯あそけたくなれり

呆あきれたる母ははの言葉ことばに

気がきつけば

茶碗ちawanを箸はしもて敵たてきてありき

草くさに臥わて

おもふことなし

わが額ぬかに養よんして鳥とりは空そらに遊あそべり

わが髭ひげの

下向したむく癖くせがいきどほろし

このごろ憎にくき男をとこに似にたれば

森もりの奥おくより銃声じうせい聞きこゆ

あはれあはれ

自みづから死しぬる音おとのよろしき

大木たいぼくの幹くみに耳みみあて

小半日こはんにち

堅かたき皮かわをばむしりてありき

「さばかりの事ことに死しぬるや」

「さばかりの事ことに生いくるや」

止よせ止よせ問答いんだふ

まれにある

この平なる心には

時計の鳴るもおもしろく聴く

ふと深き怖れを覚え

ちつとして

やがて静かに臍をまさぐる

高山のいただきに登り

なにがなしに帽子をふりて

下り来しかな

何処やらに沢山の人があらそひて

鬨引くごとし

われも引きたし

怒る時

かならずひとつ鉢を割り

九百九十九割りて死なまし

いつも逢ふ電車の中の小男の

稜ある眼

このごろ気になる

鏡屋の前に来て

ふと驚きぬ

見すほらしげに歩むものかも

何となく汽車に乗りたく思ひしのみ

汽車を下りしに

ゆくところなし

空家に入り

煙草のみたることありき

あはれただ一人居たきばかりに

何がなしに

さびしくなれば出てあるく男となりて

三月にもなれり

やはらかに積れる雪に

熱てる頬を埋むるとき

恋してみたし

かなしきは

飽くなき利己の一念を

持てあましたる男にありけり

手も足も

室いつばいに投げ出して

やがて静かに起きかへるかな

百年の長き眠りの覚めしごと

呟呻してまし

思ふことなしに

腕拱みて

このごろ思ふ

大いなる敵目の前に躍り出でよと

手が白く

且つ大なりき

非凡なる人といはるる男に会ひしに